

防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災教育チーム (第3回) 議事要旨

1. 日時

令和3年2月16日(火) 13:00~14:30

2. 出席者

片田座長、畦地委員、江口委員、大木委員、加藤委員、橋爪委員、矢守委員
関係省庁〔内閣官房(国土強靱化推進室)、消防庁、文部科学省(総合教育政策局)、国土交通省(水管理・国土保全局)、気象庁、赤澤副大臣、村手官房審議官(防災担当)〕

3. 議題

- (1) 開会挨拶
- (2) これまでの議論の振り返り
- (3) 「防災教育に関するメモ」

京都大学 防災研究所巨大災害研究センター 教授 矢守 克也

- (4) 意見交換
- (5) 閉会

4. 議事要旨

開会挨拶において、赤澤副大臣から下記の発言があった。

- このチームの目指すべき方向性としては、すべての小学校、中学校の義務教育機関が、地域とともに、地域の災害リスクや正常性バイアス等の知識を教え、それに基づき避難訓練を実践する防災教育を展開するとともに、非認知能力を育む防災教育の方策の検討や、防災教育の長期的・広域的効果をエビデンス・ベースで把握することだと考える。
- 命を守る防災教育は必要不可欠であるため、地理や算数などの他の教科と防災教育を絡めるなど工夫することで、現場の負担を極力減らしつつ、必要な防災教育に取り組んでほしい。
- 文部科学省は、必要な防災教育がきちんと実施されるのかの調査や、防災教育によって培われる非認知能力などの長期的・広域的な効果を把握するための調査を実施してほしい。

次に事務局からこれまでの会議の振り返りを説明し、その後、矢守委員から「防災教育に関するメモ」として、下記の説明があった。

- 地域に応じた災害リスクに基づき、徹底的に現実感のある、想定にとらわれない「助かる」ための訓練、活きの良い「まさか」に出会える(想定外に気が付く)訓練が必要。
- 自分の命を守り、さらに周りの人を助ける、みんなで助かることに向けた、「助ける」ための学びが重要。そのために、自分にとっての大切な人に対する「心配性バイアス」を利用した仕組みを講じることができる。

○「防災教育」を「防災に関する教育」だけでなく、「防災を通じた教育」と捉え、もっと伸ばしていくことが必要。

矢守委員からの説明後に、各委員からいただいた主なご意見は以下のとおり。

○判断力のある子ども達を育てるためには、避難訓練の内容を定型化させず、色々な「まさか」に出会える工夫が必要だと感じた。

○「定型化」とは防災教育にとって手強い敵。避難訓練の実施にあたり、同じ実施内容だとしても、季節・天気・時間・メンバーを変えてみるという取組が重要だと考える。

○単に避難訓練を実施しているかどうかの調査では、どこの学校も同じ内容の避難訓練をただ実施すれば良いになってしまう。どのような避難訓練を実施すれば良いのかのヒントを文部科学省は学校に示してほしい。

○自分が主人公となり、災害から逃げ切る物語を作る「防災小説」も想定外に気が付く取組。加えて、学校ではみんなの前で作文を発表するため、他の生徒の小説から津波警戒地域における土砂崩れの危険性など新たな想定外に気が付くことがある。

○説明を伺っていてテーブルトーク・ロールプレイングゲームを思い出した。例えば崖を登るという選択したが、登れなかった場合に次はどうするのか考える。この繰り返しで想像力に繋がると思う。そして、子ども達の環境にある「動いたら恥ずかしい」みたいな雰囲気克服するために、「ゴー（動け）」というコマンドを誰がどうやって出すのかも重要ではないかと思う。

○今回の議論は「地域」がキーワードの一つで、これはマスメディアの苦手な分野の一つだと思う。防災教育は地道に続けないと結果が出ないとよく理解できたため、例えば地域メディアがかなり密着し、繰り返し取材をしたものをストックし、皆さんに共有するようなコンテンツを、ある意味でニュース性などを度外視して作らないと貢献できないと考える。

○毎年3割の先生が異動してしまうため、防災教育の品質を担保する取組が必要。

○今の子ども達は想像する、疑問を持つという力が弱くなっていると感じている。STEAM教育のAであるArtsの思考、例えば社会問題を解決するため等のデザイン力を育む教科学習を行う必要がある。

○地域に根ざし、地域と学校の間に入って対応してくれる中間組織や専門家が重要。

○必要な防災教育を実施するためには、教員にその資質を持ってもらう必要があるため、教員養成課程も極めて重要。

○文部科学省の学校支援地域本部事業において、学校と地域の間を結んでくれるコーディネーターを配置し、10年以上経った今も活動してもらっているととても良い取組。防災という観点を加えたコーディネーターの配置を検討してみてもどうか。

○岩手県では「いきる、かかわる、そなえる」に関する観点を各教科や教科以外のところにも組み込み、横断的なカリキュラムを編成している。「いきる」が命を大切にすること、「かかわる」が地域との関わりや子ども同士の関わり、「そなえる」が防災、あるいは心のサポートのこと。教員養成にもこの3つの視点を加えていくと上手に進むのではないか。

○小学校・中学校と地域を結ぶコーディネーターを配置しているが、時間がたっぷりある人でないと難しい。1つの学校だけでは小さい仕事であるが、複数の学校でまとめて大きな仕事にし、これを職業として成り立つような中間的な組織、プロ集団が必要ではないかと思う。

○校長先生を定年退職された方が防災教育のアドバイザーに就き、後輩の先生達や別の町などで自身の貴重な経験を展開されている事例がある。

最後に、赤澤副大臣から「まさか」に出会う（想定外に気が付く）ことのできる防災教育や避難訓練が継続して実施されなければならない。そのためにも教員養成に取り組

む必要がある。」「学校と地域を繋ぐ中間組織や専門家の存在は有益だと考える。」「全ての義務教育機関が全ての子ども達に対して命を守る防災教育や避難訓練が実施されるようにしたい。」などの考えが述べられた。